

教職あらかると

わたしの道徳授業 No.1

2020.05 後藤 忠

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言が5月末まで延長され、学校の休校は3ヵ月となる。それに伴い、私の不要不急のステイホームもまだまだ続く。

今、最も注意していることはフレイルにならないことである。長期のコロナ禍により私の身体、認知、社会性の衰えは確実で、それから身を守ることが緊急の課題である。

さいわい時間だけは十分過ぎるほどあるので、その時間を利用して過去の道徳教育の実際(実態)を調べ直している。これはフレイル防止には実に有効だと思う。

さて、この「わたしの道徳授業」は今から40年前の昭和55年(1980年)に明治図書の月刊「道徳教育」に連載したものである。「なぜ今また40年も前の埃をかぶった古文書みたいなものを引っ張り出して復元するのか？」というと、

道徳科の出現とともに、今までの道徳授業をよく知らない人が「今までの道徳授業は古い道徳のやり方で実効性がない」と決めつけ、「これからはこういう授業になる」とデタラメな指導を煽る人が急に大勢出てきたことに対する驚きと戸惑い、つまり、子どもから学ぶことを無視し、耳新しい(だけの)机上之論、空想をもって、これからの道徳科を席卷・推進しようしていることを大変憂慮し、注意を促したいと思ったからに他ならない。

加えて、これまでの道徳授業に地道に取り組んできた(と思っていた)人までも、なぜか分からないが、こうした胡散臭い道徳に平然となびいている人がいることには、唾然とするばかりである。一体今まで何を勉強してきたのか、本当に道徳授業に正対してしっかり考えてきたのか、と情けなく思う…。

心ある若い教師たちに、本稿を是非読んでもらいたい。

そして、「あなたの道徳授業」を全力で、かつ丁寧に重ねて行ってほしいと願う。

余談ながら本稿は、毎号明治図書原稿用紙8枚(400字詰め原稿用紙だと約22枚)で、原稿提出後すぐに次の執筆に取り掛からないと締め切りに間に合わないという、自分にとっては非常に大変な10ヶ月だったことを思い出す。まだFAXも、コピー機も、ワープロもなかった時代の話である。

なお、時効?だと思うので、当時は伏せて書いた固有名詞はできる限り載せることにした。

何分、32歳の生意気な若書きでお恥ずかしい限りだが、「若気の至り」ということでご容赦いただきたい。復元に当たり、明らかな誤記と意味不明な文以外極力直していない。

<私の道徳授業 No1 6月号 1980年>

1 はじめに

とにかく大変なことだ。私にはそんなに内容がない。書くことが枯渇したらどうするのか。途中でギブアップしてしまったら迷惑をかけてしまうじゃないか…。

今回から始まる「私の道徳授業」の原稿依頼を受けたときに私はその重圧に押しつぶされ、「お断りしよう」と考えた。

数日後、編集部の園田佳子さんにお会いして、その旨を率直に申し上げたところ、逆に叱られ?てしまった。

「あまり形にこだわってはいけない。研究発表ではないのだから、現在の悩みや、あいまいとしてつかめないところを自由に、素直に書き続ければよい。」

と言われるのである。

「そうか、今までの総括をし、今後求めるべき方向をつかめばよいのか。その過程で、読んでく

ださる方と私との間に少しは共感し合える点、衝突し合う点が生まれてくれば私の責任は果たせるのか。」

よしやってみるか…、そんな気持ちになった。

2 「知は愛なり」ということ

先日、世田谷区の道徳講演会でいい話を聞いた。犬の話である。

主人は犬をとてかわいがっていた。朝夕の散歩は言うに及ばず、主人の好物のせんべいや万頭などは必ず半分犬に食べさせていた。ある日、犬は病気でぐったりと元気がなくなってしまった。その日主人は仕事で出張しなければならなかった。出張先の旅館でも犬のことが気掛かりで仕方がない。そこで家に電話をかけ、犬がどんな様子か聞いたのだが、電話に出た奥さんがひどく怒った様子でガチャリと電話を切ってしまった。

翌日帰宅した主人に奥さんは、「あなたは今まで、私や子供が病気で寝込んでいる時に電話してきたことがありますか。私たちより犬の方が大事なんですね」と叱られたという。

それからしばらくして犬は死んでしまった。

犬におせんべいや万頭を食べさせたことが直接の死因かどうか分からないが、たしかに犬の食べ物としてはよくない。犬は主人を信頼したればこそ与えられたものを素直に食べていた。すなわち、主人は犬の性質を知らずして、犬を愛していたのである。

本当に犬を愛するのであれば、犬についてもっと研究し、犬のことを第一に考えなければならなかった。主人のかわいがり方は本当に犬を愛していたのではなく、自分の気持ちを慰め、満足させるためのものであったと言えないだろうか。「知は愛なり。」対象を真に知ろうと努めることは愛の表れである。対象を知ろうとしない愛は本当の愛ではない。

このことは子どもを相手にしている私たちの教育姿勢にかかわる問題である。話をもう少し続ける。

昨年ある学校では全校あげて菊づくりに取り組んだ。

子どもたちの菊の鉢につぼみがいっぱいついてきたころのことである。A先生の組のB子ちゃんの鉢だけが育ちが悪く、つぼみどころか葉も茎も今にも枯れてしまいそうなのだ。A先生は校長先生と相談して、自分の育てている鉢とB子ちゃんの鉢とを取り換えることにした。

B子ちゃんはとてもおとなしい子だったのだそうだが、数日後の日記に次のようなことが書かれてあった。

「私の菊と先生の菊を取り換えてくれた先生の気持ちはとても嬉しいです。でも、私はあの菊を4月から一生けん命育ててきました。夏休みも毎日水をあげて育ててきました。私の菊はみんなの菊のように花が咲かないかもしれませんが、それでもかまいませんから、もう一度菊を取り換えてください。」

この日記を読まれたA先生も校長先生も「しまった。」と思われた。子どもの心といえども、とても奥深い。

(以上の話は世田谷区立松沢小学校の前校長・後藤誠三郎先生のお話である。)

私たちは教育上子どもを理解することはとても大切なことだと知っている。その知っているということは子どもの何を、どれくらい理解していることを指すのだろう。

観念的にそう思っているだけで、理解の仕方も経験的に処理してはいないだろうか。私も実はその通りである。

子どもをよく理解しようと、休み時間、放課後、子どもとよく遊んだ。しかし、理解の目標をもっていなかった。ソシオ・メトリック・テストを実施したが、それは子どもの現実の人間関係を把握するだけで、それ以上の課題を持っていなかった。グループ日記だって、個人面談だって同じであった。

研究授業になると、実態調査と称してアンケートをとる。行動観察をする。そしてグラフ化したものを研究資料として出す。ただそれだけで、いかにも児童理解を成しとげたような錯覚にとらわれている。表層的なとらえだと気付いているくせに、それ以上つつこんでいこうとしない姿勢に自分ながら腹立たしく思う。

「知は愛なり」常にしかも永遠に求め続けねばならない課題である。自分を空しくして、対象の本質を知らんとする姿勢のことか、持ち続けたいと思う。

3 私の教育活動の出発

私が初めて学校の先生をしたのは18歳の時である。昔ならば特にめずらしいことではなかったであろうが、昭和41年のこととなると奇異に思われる方もいるだろう。

私は新潟県立糸魚川高校で新潟大学教育学部保健

体育科を目指していた。元々は高校の体育教師になりたかったのである。それというのも、高校時代に所属した陸上競技部の活動にやみつきになっていたのと、監督の白倉昇先生の人間的魅力にひかれていたからである。

話はさかのぼるが、陸上競技を始めたきっかけは中学1年の運動会の徒競走で6人中6位、つまりビリになったことによる。そのことが残念で恥ずかしくて、くやしくて、運動会でせめてビリにならないようにと入った陸上部であった。

高校のクラブは程度が高いだろうとあらかじめしたが、しばらく練習の様子をながめているうちに「これなら自分も何とかやれそうだな」と思ってきた。予想どおり陸上部の練習は甘かったし、地区大会に出ても入賞者0の弱体クラブだった。自分にはそれがむしろ好都合だった。

何をやってもこれといった特技のない私は200mに出たり、砲丸投げに出たり、ハンマー投げに出たりしていたが、秋の地区新人戦のハンマー投げで運よく4位になった。それはハンマー投げをする人が少なかったからで、記録は28mだった。

2年生の秋から監督が代わり白倉先生になった。

(注:この年の10月10日は東京オリンピック開会式だった)練習は個に応じた科学的なスケジュールが用意された。練習量も質も以前とは比べ物にならない程変わったが、苦しいとは思わなかった。それは、個人が目標をはっきり持ち、先生は私たちの可能性を信じ、常に鼓舞激励してくれていたからだと思う。先生はいつも私たちと一緒に走った。先生ご自身も現役のハンマー投げ競技者で新潟県選手権7連勝中であられた。

今までは雪のため休部状態の冬も練習は続けられた。凍りつく鉄のバーベルをかついで黙々とウエートトレーニングをこなす毎が続いた。

春を待ちかね、サークルの雪を竹ぼうきではき出し、ハンマーを回したとき、軽いと思った。その感覚が自信になった。春の県大会で43m54を投げ、初めて入賞(4位)を果たした。

インターハイ予選(甲信越大会)直前に左肩を脱臼し、念願のインターハイ出場は果たせなかったが、秋の国体予選を目指して夏の練習に打ち込んだ。

私は当時主将をしていた。少数ではあったが精鋭ぞろいの部員たちはメキメキと実力をつけて行ったし、士気は盛んだった。

「自分は県下の誰よりも一番練習をしている、その確信をもって競技にのぞめ」

先生の激励に応えんと闘志むき出して競技にのぞんだ。そしてついに47m00を投げ優勝した。台風直下、大雨の柏崎市宮陸上競技場であった。練習でも出したことのない記録である。

何のとりえもなく、自信がなかった自分をここまでしてくれた白倉先生への感謝と感激で、この時はっきり「先生のあとをつぎたい」と思った。

しかし、競争率17倍の入試の壁は厚かった。入試に落ち、浪人になった。家が貧乏だったので私立大学は受験していなかった。

発表の翌日、私は母校能生中学校の校長先生を訪ね、こうお願いした。

「将来、体育の教師になりたいと思っているので、体がなまならないように放課後陸上部の練習の手伝いをさせてもらえないか。勿論、無報酬で。」

すると校長先生は、

「立派なところがけだ。それなら隣の中学校でお産で休んでいる数学の先生の代わりを探しているので、3ヵ月だがやってみないか。」

と言われるのである。そんなことできるのですかと聞くとおっしゃる。職名は「臨時的助教諭」、月給15,000円。お金なんてどうでもいい、先生の真似事ができるだけで素晴らしい、親にも相談なしで引き受けてきた。

その学校で一番最初にしたことは陸上部を創ることだった。全校男子の3分の1が入部した。とにかくすごい人数だった。女子も十数名はいたと思う。

6月初旬にある郡市陸上大会に向けて猛練習が始まった。大会まで2ヶ月しかないというあせりもあって強行スケジュールで練習を組んだ。田舎なので列車の本数は少なく、朝も遅いので自転車で15kmの道を通った。夜は前が見えなくなるまで練習した。子どもたちはタフでよく練習についてきたが、多くの故障者を出して、体育主任からきつく叱られた。私は体育主任に猛然と反発した。

「子どもの可能性を伸ばすことがなせいけないのですか。先生は放課後のクラブ活動にほとんど出ていないじゃないですか。」

私は、体育主任が私へのやっかみで叱っていると本気で思った。すると、主任は青すじたてで怒り始めた。何と言われたかは覚えていないが、くやしくてくやしくて、その日もらった月給をビリビリに破って海へ投げすてた。涙をポロポロ流しながら自転車にのっていたことだけが思い出せる。

6月の郡市大会で優勝者を続出させて見返してや

れと、鬼のごとく練習に明け暮れた。

いざ大会の日、優勝4名、入賞多数、めざましい結果であった。郡市記録を破ったものが1名出た。ざまあみやがれと、まさに有頂天だった。

しかし、しょせん2ヶ月の指導は付け焼刃でしかなかった。優勝した子どもは天狗になっていった。また、女子の中にはつまらないことで「えこひいきしている」といううわさが立っていった。1人、2人と部員が去っていき、私の任期が終わる6月末には1、2年生数人しか残っていなかった。私は怒り続けていた。あせっていた。こんなはずじゃなかった。しかし、1度離れて行った子どもの心は再びもどってこなかった。今思えば「知は愛なり」の心が全くなかったためだと思う。

教師に失望し、教育に魅力を失い、自分の目標を見失って、受験勉強が全く手につかなくなってしまう。海ばかり見ていた毎日だった。

母はそんな様子をひどく心配したようだ。おじがとなりの市の教育委員会にいたので相談をし、私をもう一度どこかの中学校で臨時教員をさせようとした。気は進まなかったが、あの思い出を少しは忘れられるかと思い、9、10、11月の3ヵ月務めた。

今度はあまりむきにならず、ごく当たり前？にやろうと決めていた。先生方もおだやかで、特に新卒の先生は友達みたいに接してくれた。

子どもたちとはうまくいっていた。陸上部は駅伝に向けて頑張っていた。子どもたちは走るのが大好きだった。私の中にもう一度先生を目指してみようという気持ちがおきはじめた。

いっそ通信教育で教員免許を取ろうとも考えたが、先生方に反対された。大学4年間は人生の中でとても大事な期間であること、教育を学問として身につけるには大学教授との人間的交流がとても有意義であることなどを経験者は忠告してくれた。私は前校とは全くちがう感情でこの中学校を去ることができた。

学校長の強いすすめで玉川大学へ進学した。体育専攻ではあったが「教育とは何か」をじかに知りたいたいと思い、クラブ活動は「僻地教育研究部」を選んだ。僻地を教育研究の舞台とし、子どもの教育上の問題を様々な環境要因と関係づけて調査するという研究で、対象は小学生だった。部長の東岸克好教授のもとで4年間研究活動を続けた。教育を科学する体験は貴重だった。今までにはない、全くちがった教育の見方・考え方が私をつつみ始めた。

また、卒業研究に選んだ「ペスタロッチの『探究』における人間発展の過程」は私に人間への愛着と教育の奥深さを体験させてくれた。

大学へ入って本当によかったと思った。卒業式の小原國芳学長の訓話には思わず涙がこぼれた。

4 第二の出発

私は大学を卒業すると鹿児島島の小原國芳学長生誕の地にある玉川学園久志高等学校に就職した。小学校教師になりたいという気持ちはあったが、それほど強いものではなかったし、教員免許は中高保健体育だけで、小学校はもっていなかったからである。

この高校に入学してくる生徒は、学力、家庭の事情等で県立高校に行けない生徒たちだった。特に学力はきわめて劣り、分数の計算ができない生徒もかなりいた。中に優秀な生徒もいたが県立高校の受験に失敗して、しかたなくこの高校に入学してきたという劣等感がつきまとっていた。

われわれはこの生徒たちに何をすべきかと真剣に考え合った。幸い、教職員数が少なかったので共通理解ははかりやすく、学校行事と労作教育（勤労体験的教育としての）を学校教育の中核にした。

てんぐさ採り、貝(ミナ)獲り、なたね栽培、さつま芋づくり、にわとり飼育、ポンカン栽培等々。

行事は、体育的・学芸的行事合わせて年間10はあったと思う。それも、できるだけ生徒自身の手による運営をはかった。たった2年間ではあったが、教職員一丸となった骨身をおしまない指導によって生徒の荒んだ心は明るさをとりもどしていった。

私は体育だけではものならず、無免許ではあったがお願いして、古典乙1（漢文）、倫理社会、音楽（合唱）の一部を持たせてもらった。今思えば、でたらめな指導だったが、生徒といる時間が一番楽しかった。

その間に私は高校教育の限界を感じ始めていた。この生徒たちの資質なり可能性なりをもっと早い時期に開発していればもっと伸びただろうに…。なまいきなようだが、「この生徒たちの根本は小学校にある。」と思った。私は玉川大学の通信教育で小学校の教員免許をとり、東京都の採用試験を受けた。（この高校は、残念ながら諸事情により廃校になった。）

5 第三の出発（道徳授業の出発）

昭和48年、墨田区立錦糸小学校に奉職して4月、校内で区の教育研究会の所属を決める会議があ

った。私は特技である体育部に所属したかったのであるが、校内には赤坂栄子先生というベテランの体育主任がおられたし、他の研究部に穴を開けてはいけないということもあり、体育部以外の別の研究部に入ることになった。新任は希望が通らないだろうと空席を待った。残った部はたしか家庭科部と学級経営部と道徳部だったと記憶している。

部の内容がよく分からないので若い先生3人でじゃんけんをしてきめた。私が一番負けて、最後に残った道徳部に入ったというわけである。不純と言えば、全く不純な動機である。

初の道徳部会で「各学校における道徳指導上の問題点を持ちよう」ということになった。道徳のドの字も分からない私は紙とえんぴつをもって校内の先生方に「問題点、問題点」と聞いてまわった。そして、がっかりしてしまった。

「道徳は本来家庭で身につけるものなんだよ。いくら教えたってだめな子はだめだよ。万引きにしたって何にしたって、親を呼んでいくら面談しても、親が夜の勤めで子どもをほったらかしにしている以上、直りっこないんだから。」

子どもを相手にし、子どもの全人的育成をめざすはずのわれわれの仕事において、子どもの現実を父兄のせいにしてたり、単純に社会の影響に結びつけて、悟りきったようなことを言っている。そうすることによって、自己の怠慢を弁護しているのかとびっくりしてしまった。

それに、中学校や高校とちがって小学校というところは何と仕事の種類と量が多いところか。新任者にはさっぱり内容が分からない。先輩の経験豊かな人がちっとも後輩の指導にあたらぬ。これでは前述のような先生がいても不思議はないと思った。

「道徳時間の特設は軍国主義における修身科の復活である。」

「体制に従順で無批判な人間をつくることには賛同しかねる。」

当時は「はあ、はあ。」と聞いていたが、今思うと不勉強はなはだしい。50歳近い人の言葉かと思うと情けなくなる。

「自分は道徳的価値を実行できないから、子どもに道徳を指導することはできない。」

道徳は聖人にしか指導できないのか。どろどろした、ペスタロッチのいう「人間のぬすみ心」と「赤子の無邪気」にあこがれる心とのからみあい道徳

ではないのか。

また、「道徳はむつかしくて」とあきらめてしまっている人もいた。

さらに、具体的な道徳授業の悩みについては、

- テレビを見た後、どうしてよいか分からない。
- 読み物資料で授業を行うときがあるが、資料の内容がりっぱすぎて、子どもたちの現実の生活に合っていない。子どもも「しらけ派」が多くなっていてちっとも感動しない。
- 子どもの発言は、主に「正しい答え」を言おうとするものが多くて、当たり前反応しか返ってこない。子どもの答えは「〇〇すべし」といった形式的なもので、発問→答え（反応）の間に何ら心にひびくものがない。

このような悩みは私自身の悩みでもあった。だからといって道徳授業を拒否したり逃避したりしては何の解決にもならない。

まず道徳教育の目的や目標をしっかりと理解することから始めなければ何も考えられないと思って、いろいろな本をあさり読んだ。中でもおもしろいと思ったのは古本屋でみつけた「新しい道徳教育のために」（文部省・昭34）という本だった。この本は、昭和33年に行われた文部省主催道徳教育指導者講習会における講演の要旨を中心に編集されている。天野貞祐、日高第四郎、村上利亮、皇至道、平塚益徳、淡野安太郎、稲富栄次郎、小沼洋夫、安藤堯雄、大島康正といった大先生たちの講演である。この本に啓発されてか、私は当時、次のようなことを日記に書いていた。

道徳教育の目標は善意思を養うことと道徳的判断力を高めることである。これは個人の良心を媒介として成り立つものであり、教育の目的たる自主的・自律的人間の育成にはなくてはならない要素である。したがって知的にも理解し、価値を深めてゆかねばならない。それだけでなく、いわゆる「しつけ」と「訓練」による基本的生活習慣の獲得も大きな要素となる。

道徳教育は学校教育のすべての中で行われるべきだが、道徳の時間はより純粋にその本質に従って意図的に計画、組織し、その一方では現在を生きる子どもの経験領域、社会環境、家庭環境の実態を把握して行われる必要がある。

（東京都世田谷区立東大原小学校教諭）